土器・瓦26

遊山の器

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

信楽土の３つの器　上から樂風の茶碗１、半筒の茶碗２・３

三条界隈には、桃山時代の焼物屋の町がありました。「せと物や町」といいます。これまでに、５軒の焼物屋が見つかっています。

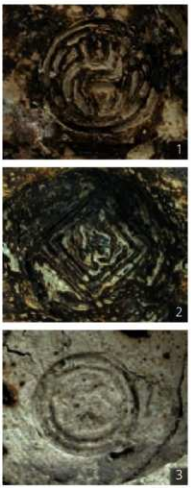
その内の１軒、リーフレット京都No.225で紹介した、中京区富小路三条上る福長町の焼物屋から出土した物のなかに、不思議な茶碗が３つあります。

樂（らく）風の茶碗１点と瀬戸（せと）黒風の半筒の茶碗２点で、いずれも信楽の土で焼かれた物ですが、全体に鉄分の多い釉薬が掛けられています。

樂風の茶碗（１）轆轤（ろくろ）で成形した後に手を加えて、胴をくびれさせたり、口縁の内側に粘土を貼り足して内湾させ、樂茶碗風に仕上げています。

かなり温度の高い時点で窯から引き出して急冷し、黒味を帯びた色合いに焼き上げています。黒樂茶碗を意識したのでしょう。

高台は、径が７cm程の低い貼付けの輪高台です。轆轤から切り離してすぐの、粘土が軟らかい状態で、底部の中央を丸味を持たせて押し出しています。底部の外面を調整する時に、器を支える為に湿台（しったい）を用いるのですが、湿台で底部を押し出したのかもしれません。内側を茶溜まり風に窪ませ、外側に粘土を貼り付けて高台を造っています。ヘラ調整を加えていて、剥離していなければ、削り出し高



茶碗の刻印

台に見えるほどです。

高台の内と底部の端の２箇所に丸い印が押されています。底部の端の印は半欠けで、脇に「メ」の字状のヘラ記号も見られます。

半筒の茶碗（２・３）　２点とも轆轤で成形した後に、斜めあるいは横方向にヘラで削ってアクセントを加えています。

２点とも、ゆっくりと窯が冷えてから取り出していて、鉄釉は茶色に発色しています。（２）は、灰釉が掛かっているのですが、とても窯の中で自然に掛かった灰釉には見えません。鉄釉の上から部分的に灰釉を掛けているようです。

高台は、５～６cmの楕円形気味な貼付けの輪高台で、端部が肥厚して丸味を帯びています。粘土の継ぎ目が残っていたり、部分によって厚さが倍ほども違います。端面は凹凸があって、擂（すり）の悪い高台です。

内面は、（２）の底部には布目の痕跡が残っていて、高台の貼付け時に、布を被せた湿台を用いていたことがわかります。ただ、高台の内に角印を押す時に、底部が内に押し込まれているようです。ゆがみの最も大きい部分は、焼成時に窯割れしていますから、ひびが入っていたのかもしれません。（３）では湿台の当たりは残されていませんが、高台の貼付けや高台内の小さい丸印の押捺で、底が歪んではいませんから、使用していたと見てよさそうです。

刻印　角印と丸印がありますが、３点とも別の印です。窯印ではなく、制作者個人を特定するために押された印と理解できます。特に（２）の角印は、凸部の高低が激しく拓本にも取れないほどです。

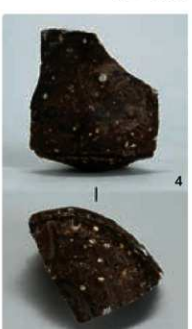
銘は判読できませんが、落款のようです。焼物の専門家ではなく、絵や書を嗜（たしな）くする人達の作品とすれば、粘土を貼り足したり、造りや調整の未熟なことも頷（うなず）けます。能書家・絵師あるいは文人などが考えられそうです。

高台　この時期の茶碗は、瀬戸だけでなく美濃・唐津などでも削り出して高台を造ります。樂焼もそうですし、同じ調査で出土した信楽焼の茶碗（４）も削り出しています。しかし、（１）の樂風の茶碗などは、削り出し高台に見せながら貼り付けています。このことから想定できるのは、高台を削り出すのに必要な乾燥の時間がとれなかったのではないかということです。貼付け高台で一気に器を仕上げたのかも知れません。

作陶の旅　これらの器は、造りからみて想像をたくましくすると、焼物屋が大事な顧客を招いて催した、作陶の楽しみを兼ねた旅行での作品だったように思われます。京に信楽の土を取り寄せて作ったのではなく、信楽の窯場まで行って作り、後は職人に任せて、乾燥・釉掛して焼き上げたものを焼物屋に送らせたと見る方が妥当なようです。

三条から東海道を下って石山で宴をして、翌日は信楽で作陶の後、東に足を延ばして塩野温泉で湯に浸かり、３日目は粕川（ちがわ）か野洲川から舟で下って、琵琶湖を大津まで進み京へ帰るとすれば、２泊３日の作陶・遊山の旅ができそうです。きっと山が燃えるような、紅葉の季節だったことでしょう。

（原山　充志）



信楽焼の茶碗